

ネコ、踏ん
じゃった！
南海部
覚悟



大学病院の一室、穴見愁子の診察室。

隣の処置室では、玲子がベッドの上で微かな寝息を立てています。

何時もの様に肘掛椅子に深々と腰を下ろし、長い電子煙草の煙を吐きながら、女医がソファの笑子に尋ねます。

「脹脛の咬み傷のこと、詳しく話して・・・。」

言葉の背後に、只ならぬ真剣さが読み取れます。

「先輩は、今どうしてるんですか？」

心配そうに眼を潤ませて、笑子が訊き返します。

「軽い麻酔で寝てるから、心配ないわ・・・。」

「咬み傷は小さくて、もう治ってるのに、傷の周りがチカチカして何だか熱っぽいって、急に云い始めて・・・。」

「そんなことはどうでもいいの！あの傷は、何処で何に咬まれたのよ！」

肘掛椅子から立ち上がり、苛立った表情で笑子に噛みつきます。

「一か月前の被疑者逮捕の時です。向日市の廃工場に潜伏してたのを、一課総出で踏み込んだんです。日も暮れて暗い雨の中、気付かれないよう灯りを点けずに近付いて、逮捕しました。その時猫に咬まれたんです、暗い床で寝てた猫の尾を踏みつけたようです。」

「直ぐに、病院で治療したの？」

「はい、府警本部近くのクリニックで診て貰いました。」

「そのクリニックのTELを教えて、当日の処置を確認するわ。」

携帯で話す表情が、みるみる険しくなります。電話を切った後も暫らくの間、空を見詰めて動こうとしません。

堪りかねた笑子がソファから立ち上がると、「玲ちゃんを・・・暫らく私に預けて、必ず治してあんたに還すから。」

「―――どうということですか！穴見先生！先輩病気なんですか！先生の云うこと、何でもしますから助けてください！」



診察室の窓の外を、暗い雨が打ち続けます。梅雨末期の容赦のない雨音が、堅牢な鉄筋

の建物をも、細かく震わせているようです。

「取り乱さないで落ち着いて訊いて――。」

「玲ちゃん、“リッサウイルス”に感染してる。咬み傷直下の組織から蛍光抗体法で確認できた。麻酔をかけて、足の脛骨神経・坐骨神経と脊髄から髄液をサンプリングして、何処まで感染が広がっているか今確認しているわ。」

「――リッサウイルスって？」

「ラブドウイルス科リッサウイルス属――同じ遺伝子型のひとつに狂犬病ウイルスがあるわ、7つある遺伝子型のどれに感染したのか、直ぐには分からない。」

「でも、診て貰ったクリニックに4回も通院して、注射打ってるんですよ。念の為だって云って……。」

今にも泣きだしそうな顔で笑子が訴えます。

「曝露後ワクチンね、電話で訊いたわ。既存の狂犬病ワクチンなら7つの遺伝子型全てに効果があるはずなんだけど……ひと月たって傷跡からまだウイルス抗原を確認できるってことは……効いていないのかも知れない。ウイルス変異ってこともあり得るし……。」

ソファの脇に佇んだまま、思い詰めたように両肩を落とした笑子に、日頃の闊達さを見る影もありません。

手にしたスマホを耳に当てた直後、そのままソファの上に落としてしまいました。

スマホが滑り落ちた小麦色の指が、耳の横で小刻みに震えています。

「そうね、あんた一人じゃ無理かもしれない。貴女達を全力で支えてくれる知合いに連絡して……。」

一時間後、同じく穴見愁子の診察室。

刑事部長の永山と、科捜研の奥寺が女医の話を訊いています。

「昼過ぎにここで検死報告書を渡した時、足を痛そうにしてたものですから……傷口を見て尋常でないことが、直ぐに解りました。」

「ワクチンが効いてないと？」永山が暗い顔で尋ねます。

「その可能性があります、咬まれた後に処方するワクチンを、曝露後ワクチンと云いますが、玲ちゃんは既に4回接種しています。通常5回で完了する治療ですので現時点でまだウイルスを確認できるのは……。」

「――治療はここで行うんでしょうか？」奥寺が神妙な顔で尋ねます。

「ここでは出来ない、もし脊髄を含む神経中枢系に感染が及べば、治療法は“ミルウォーキー・プロトコル”に限られる。長い期間集中治療室を占領することになるわ。第4

類に指定される感染性ウイルスでもあるから、治療設備自体相応の性能とスタッフの覚悟と準備が求められる。周囲の喧騒に邪魔されない穏やかな環境が必要だわ。」

「東山の東恩納医師の邸宅は、今誰が管理してるの？」

「府警警備部です。医療設備のメンテナンスは私たち科捜研で担当しています。」

「あそこの地下手術室使えない？あそこなら、設備と環境に不足は無いわ。」

「分かった、東山の邸宅は何とかする。それと、咬みついた猫の確保が必要だよな？」
永山が真剣な眼差しで確認します。

「一か月前の話ですから、咬んだ猫はもう死んでいると思います。でも、必ず周辺に、同じように咬まれた猫なり犬なりが存在する筈です。生きてなくても、時間がそれ程経過していなければ、抗血清が採取できます。玲ちゃんを救う、最も確実な方法です。」

「――保健所と協力して、全力で捜査にあたる。」

「それと、可能性は低いと思いますが、もし今回ウイルスの抗原変異があったとすれば、既存のワクチンは効果がありません。防疫上の対策が緊急に必要ですし、二次感染個体の確保に当たっては、絶対に咬まれない配慮が求められます。」

「了解した、本部長を含め全署員緊急に対応させる。」

それだけ云うと、永山は大急ぎで部屋を出て行きます。

エアコンの効きが悪くて蒸し暑く暗い部屋の中に、笑子と奥寺が残されました。

「あなたたちはもう少し残っていてね。リッサウイルス感染症と、治療方針について今から説明するから。」

「ミルウォーキー・プロトコルって何ですか？」

笑子が弱々しい声で尋ねます。

それには答えずに、「リッサウイルスは、主に感染動物の唾液を経由して他の個体に感染するの。体内に入ると直ぐに末梢神経の軸索に侵入する、血液やリンパには出てこないわ、神経細胞に親和性があるのは細胞質が弱酸性だからって云われている、弱アルカリの組織液や血液、リンパ液の中ではウイルスRNAが破壊されて生きていけないのね。軸索に入ったウイルスは、逆行性軸索輸送によって脊髄に運ばれる。ただ感染速度が遅くて一日に十数ミリだって云われているから、玲ちゃんも咬まれて一か月たつのに、まだ発症していないのよ。脊髄内のニューロン(神経細胞)で増殖しながら、複数のシナプスを通過して脳に達する、脳と唾液腺で爆発的に増殖して唾液に排出される、唾液は通常弱酸性だからね。」

「ミルウォーキー・プロトコルって云うのは、2004年にアメリカで最初に行われた治療法よ。複数の麻酔剤によって患者を昏睡状態に導く、生命活動をぎりぎりまで落として、仮死状態まで誘導するの。それによって、ウイルスの軸索輸送を停止させ、患者の脳を守る。大量の抗ウイルス薬を投与して、免疫系抗体の分泌を待つわけ、15歳の患者は6日後に奇跡的に回復したわ。」

「それを玲子さんに試してみようって云うんですか？」奥寺の言葉の背後に明瞭な不安が見え隠れします。

「既存のワクチンが全く効かないなら、それしかないと思ってる・・・。」



故東恩納医師の京都東山の邸宅は、京都府警によって半年の間、嚴重に管理されてきました。

事件の検証が完了した以降も、遺伝子工学に関する様々な研究資料、機材、薬品等の保管、将来研究の対象となる医学標本の維持、アクセス依頼が絶えない個人サーバーへのメンテナンス等は、他人任せに出来ない警察行政の重要な任務でした。

SRIのスタッフと協力しながら、地下に配置された様々な医療設備の作動状況を確認しつつ、奥寺が笑子に呟きます。

「あの先生一人で、本当に大丈夫なんだろうか？確かに尋常でない実力は認めるけど・・・大学病院の隔離病棟のスタッフに、集中治療で対応して貰った方が良かったんじゃないの？」

「私もあの先生苦手なの・・・奥寺君も知ってるじゃない。でもね、私たち二人の命の行末に深く関与して来れるのは、あの先生しかいないって気がする・・・。」

「―――どうして？」

「何だか解らないけど、そんな気がするの。半年前に命を救って貰ったからかも知れない、同じレスビアンだからってことかも知れない、もっと他の理由があるのかも知れない・・・。」

「さっき携帯に電話があったわ。今から救急車で大学病院を出発する、麻酔はこのまま継続させるって・・・治療に入る前に、一言でいいから話をさせてって頼んだら、甘い！って一蹴された・・・。これからそっちで命懸けで治療するんだって。」
大型の医療機械を統括する、オペレーションコンソールのモニターが明滅します。

「ミルウォーキー・プロトコルについて調べたんだ・・・。」

「それで？」

「確実な記録が残る、治療を受けた患者36人の内、助かったのは5人だけだ。14%に満たない、穴見先生に縋りたい気持ちは分かるけど・・・。」

「――治療しなかった場合の致死率は？」

僅かに逡巡して、「100%・・・この治療法以外で、発症した患者が命を永らえた記録はない・・・。」

「―――紹介するわ、私の医療行為の助手、範子と果菜子、姓は省略。二人ともちゃんとした医師よ。」

30前後の女性のように、大きな医療マスクに隠れて、表情ははっきりしません。玲子はストレッチャーの上で、相変わらず微かな寝息を立てています。

穏やかな寝顔を見る限り、死に瀕した患者とはとても思えません。

「髄液サンプリングの結果が出たわ。仙骨の中の馬尾神経まで感染が進んでる、脊髄の中樞神経系に到達するのは、時間の問題よ。もうグズグズ出来ない、ミルウォーキー・プロトコルを開始するから―――いいわね！」

「いいわねって・・・先生。」

「承諾を求めているのよ！あんたが唯一の身内なんだから、オタオタしないで、シッカリなさい！」

助手の方に振り返ると、「人工心肺準備、ウームプール準備、ラリンジアルマスクで気道確保、服を脱がして全裸にして！」次々指示を出します。

30分後には玲子の白い裸体は、円筒形アクリルガラスの透明なプールの中に浮かんでいました。口や脇腹に、無数のパイプが挿入固定されています。

「“ウームプール”って云うのよ、中の液体は人間の体液に近い生理塩類溶液、水温、浸透圧とPh、各種イオン濃度を調整して生理環境の恒常性を維持してる。重力による鬱血を排除して、人工心肺による血栓を防ぐ意味もあるわ。ここに有る装置は全て最新式で、玲ちゃんの生理環境を学習して、拍動の再現や血流量の調整、体温変動、必要な化学物質の加減にも対応してくれる、抗凝固剤の使用も微量で済むから、生体に負担を与えずに長時間の体外循環が可能だわ。今から少しずつ麻酔の量を増やしていく、明朝までには呼吸と心臓が停止して、限界まで代謝を落した仮死状態に誘導出来ると思う。」

「病気の進み具合は、どうやって診るんですか？」

「―――穿刺術による組織液のサンプリング、東恩納医師の施術資料が役立ってるわ。半年の間、徹底的に読み込んでスキルを磨いたの。東恩納医師なら、今の玲ちゃん救うことなんか朝飯前かも知れない―――すごい親戚を持ったわね、犯罪者とはいえ惜しい医師を亡くしたわ。」

手術準備室の大きな観察窓から見通すと、暗い中プールに浮かんだ玲子の体だけがLEDの光を受けて白く輝いています。まるで湖面に微睡ろう女神のように、幻想的です。

「それにしても、綺麗な体・・・40前の女とはとても思えない。」

「先生は、先輩の命救ったら、誘うんですか？」

「―――どうして？」

「命の恩人から誘われたら・・・先輩断れないと思う。私だって止められない・・・。」

「——あのね、もう気付いてると思うけど、あの二人私の愛人なの。」

急に声を潜めて、準備に忙しい二人の医師に視線を投じます。

「若くって艶っぽくって、感度良いのよ。毎晩、二人まとめてヒィヒィ泣かせてあげてるわ、だから40前のおばさんに用は無いの。少なくとも玲ちゃんにあんたがいる限りね・・・。」

女医を見詰める笑子の両眼から、大きな泪がはらりと床に落ちます。

玲子のプールに振り返った背中越しに、「あんたこれからどうするの？此処で玲ちゃんに付き添う？」

「ここに居て手伝えることがありますか？」

「——ないわ。」

「感染した猫か犬を見付けないと、先輩助からないんでしょ？」

「——そうよ。」

「だったら、廃工場の皆と合流します。命懸けで探して連れてきます！」

「その意気よ！あんたらしいわ！」



向日市の廃工場には、雨の中50人を超えるスタッフが集まっていました。

乙訓保健所の担当職員、近畿厚生局の担当職員、京都動物園の飼育員、京都医師会・獣医師会からのボランティア、京都府担当職員、向日市担当職員、地元自治会役員、向日町警察署員、府警各部署からの有志・・・等々。

念の為、捜査に加わる全員に曝露前ワクチンの接種が実施され、夜を徹しての捜査に掛かります。

不気味な夜の廃工場に、無数のライトの光が錯綜します。

「二次感染してるとしたら、やっぱり猫かしら？」

笑子が奥寺に話しかけます。

「——そうだね、猫が大型の犬に咬みつくとはいえにくいね。」

「小型犬は？」

「小さいのは散歩以外出歩かないだろう・・・街中だから野犬も居ないだろうし。」

「夜出歩くのは猫だけ？」

「猫も犬も、基本的には夜行性なんだ・・・人間社会に合わせて、昼間無理に活動しているだけだよ。」

「感染して発症して、夜行性の本能が剥き出しになるってことは？」

「あり得ないね、寧ろ水を怖がったり、風を怖がったりするって云うから、建物の奥の、人気のない場所で移動しないで留まってるんじゃないかな。」

「―――じゃ、範囲は限られるわね。」

成果が無いまま、一夜が明けました。

あれだけ激しかった梅雨末期の豪雨も、嘘のように晴れ上がり、早朝の陽光が廃工場の水溜りに眩しく反射しています。

捜査に参加した面々は、暗い中、工場のあらゆるドアを開け、内部を確認し、側溝の蓋を外して、排水管の中にファイバースコープを通して確かめました。

明け方、周辺道路の側溝の中から、カラスの死骸が見つかって色めき立ったのですが、リッサウイルスは鳥類には感染しないという獣医師の見解が、参加者全員の落胆を誘いました。

周辺住民に注意喚起する必要もあり、保健所職員、近畿厚生局職員、府・市の職員、医師会ボランティア、自治会役員は対応の為現場を離れます。

捜査の主体となった府警スタッフ、向日町署のスタッフとで、行方不明のペット、様子のおかしい犬猫がないか、周辺の住戸聴取に廻ることにしました。



「廃工場に住みついている猫が1匹いたよ、人懐っこくてウインナーや魚の缶詰を持っていくと、何処からか出てきて近寄って来るんだ。」

「野良猫で年取ってるから、連れて帰って飼う人はいないけど、近所の人みんなよく知ってるよ。でも、最近見なくなった、死んだのかな？」

土曜日の午前中、校庭でサッカーを楽しむ小学生達からの情報です。

同様な野良猫の話は、周辺住戸の方々に訊くことが出来ました。

「白黒縞のキジトラです、縄張り意識がかなり強いようで、体も大きくて、工場に入り込む他の猫を、一方的に蹴散らしていたと云います。一か月ほど前から、ぱったり姿を見せなくなったそうです。」

若い三課の刑事が、詳しい話を報告してきました。

「一か月前？黒木が咬まれた頃だな。」

疲れきった顔で永山が呟きます。

陽が高くなると、笑子は玲子の様子を見に、東山に車を走らせます。

「いちいち戻ってこなくていいのよ、経過はメールで送るし、何かあったらすぐ電話するから・・・。」

徹夜明けの目尻を擦りながら、穴見がうんざりした顔を出します。

手術準備室の窓から見る、水中を漂う玲子の裸体は、昨夜と変わらないように思えます。

「心臓も、呼吸も停止してる・・・代謝が落ちて、排泄も殆ど無いからほぼ仮死状態よ。」

「考えられるあらゆる種類の抗ウイルス剤、免疫グロブリンを試してる。既存ワクチンも継続して投与したわ。感染速度が遅くはなってるけど、止められない・・・今朝の時点で脊髄に達したわ。」

「脊髄が侵されたらどうなるんですか・・・？」

「脊髄の神経細胞体が全て破壊されることはないわ。破壊された細胞も後で再生できるし・・・其の為の成体幹細胞も、穿刺術で既にサンプリングしてある。」

「怖いのは脳本体まで感染が及ぶこと、そうなったらもう手の施しようがない・・・。だから何が何でも脳幹の手前、つまり延髄の根元で侵入を喰い止めるのよ。感染速度を厳密に計算して、危険域に入ったらもう一段別の処置をやる、"ミルウォーキー・プロトコル+ α "よ・・・。」

「プラスアルファ？」

「その段階になったら説明してあげる、今は早く抗体を持った犬か猫を連れてきて！」

廃工場に引き返すと、近くの公民館で、周辺住民の曝露前ワクチンの接種が始っていました。全員不安そうな様子で、順番を待っています。

「野良猫の行動半径はどの位なんですか？」

奥寺が獣医師を捉まえて質問しています。

「半径500m程度ですが、今度の場合周辺住民から工場内で餌付けされていたようなので、工場から出ることはめったになかったと思います。」

「猫は環境の変化を嫌うんですよ、安定して餌が取得できれば、ずっとその場に居着く習性があります。」

動物園の飼育員がフォローします。

「自分の死に場所を、遠くに求めるって聞いたことがありますか？」

「実際調べてみると、そんな傾向はありません。交通事故や縄張り争いで追い出されない限り、行動半径内で天寿を全うしています。」

「先程、カラスの死骸を処理しに来た市の担当職員の話ですと、ここ2か月程この地域で、交通事故の動物を処理した記録は無いようです。」

午前中の三課の若い刑事が、手帳を見ながら報告します。

「縄張り争いに負けたとは考えられんしなあ・・・。」

近くの住民から取得した、丸々太った巨大なキジトラの写真を、スマホの画面で確認しながら、永山が呟きます。

「一か月前の、被疑者逮捕の夜も、昨夜のような雨でしたわね部長。」

笑子が思い返しながらか永山に同意を求めます。

「そうだな、昨夜ほど酷くは無かったが、工場の床は一面濡れていた。それに風が強かったから、被疑者に気付かれずに近づけた・・・。」

「ちょ、ちょっと待ってください。玲子さんは何処で咬まれたんですか？」

奥寺が周囲を見廻しながら、素っ頓狂な声を挙げます。

「今お前が立ってる、其のコンクリートの壁の辺りだが、どうかしたのか奥寺？」

「よく廻りを見てください、鉄骨屋根のスレートに大きな穴が開いて、床は雨水でビシヤビシヤです、外壁のパネルも同様に吹き曝し、感染症を発症して水と風を恐れる猫が、長い時間過ごせるとしたら・・・。」

「そうか！おい、その壁の向こう側は何なんだ！」

壁の向こうはエレベータシャフトになっていました。2m程のピットに雨水が溜り、8m程上空にかごの底が見えています。

「かごの中は調べたのか？」

「はい、2回確認しています。異常はありません。」

「―――かごの屋根の上は！」

永山が云い終らないうちに、若い刑事3人が階段を駆け上がります。

開いたエレベーターの扉の隙間にドライバーをねじ込んで固定し、かごをゆっくり降ろします。

太いワイヤーロープを固定した鉄骨の隙間に、やせ細った猫の腐敗しかけた死骸が見えてきました。



「残念ね・・・抗体は採取できなかつたわ。時間が経ちすぎてる、送ってもらった脳組織のたんぱく質、みんな壊れてた。抗原も抗体も不完全、破片だらけ・・・今はとにかく、二次感染個体を大急ぎで探して！」

穴見の電話の声に、焦りの色が滲み出ていました。

獣医師によって猫の死骸から採取された脳組織を、保存液に浸して白バイで緊急輸送した一時間後の電話でした。

「死んで一か月位だと思います。お宅の刑事さんが咬まれた直後かも知れない、周囲を歩き回った様子もありませんし、他の猫や犬がここに上って来た痕跡もない、これじゃ刑事さん以降の二次感染個体を探し出すのは、難しいかもしれませんね・・・。」

獣医師が暗い表情で話します。

笑子の全身を、深刻な脱力感が襲います。視界の露出が一気に落ちて、フラフラとよろめいた刹那、永山と奥寺が体を支えていました。

「―――白河、少し休め。昨日から一睡もしてないだろう？」

「みんな同じです！みんな非番なのに先輩のこと心配して・・・。」

どっと溢れる大粒の涙が、充血した眼に沁みて瞼を開くことが出来ません。玲子との思い出が、瞼の裏に集積されて・・・めくるめくマルチスクリーンの様に再生されます。

両肩を抱きかかえられ、警察車両のリアシートに横になったその時でした。

穴見女医からのメールに気が付きます。

―――相談したいことがあるから、3人でこっちに来て―――

東山の邸宅の応接室で3人が待っていると、眼窩を落ち窪ませた女医が、地下から白衣姿で上がってきました。

両腕を組んだままゆっくりとソファに腰を下ろすと、「プラスアルファを実施したいの・・・。」

「プラスアルファ？」永山と奥寺が口を揃えます。

「私の計算では、あと8時間でウイルスが延髄の根元に達するわ、もう時間が無い、今ここで抗体が手に入ったとしても、玲ちゃんの体に投与できる状態に処理するのに、最低5時間はかかる・・・本当にもう時間が無いの。」

「で、どうするんですか？」

低い声で、奥寺が尋ねます。

「玲ちゃんの首を外す・・・。」

ハッとした気配の後、長い沈黙が応接室を包みます。

打沈んだ空気をそのままに、女医が低い声で話し始めます。

「今から3年前にオランダで、破傷風の毒素(テタノスパスミン)から2種類のタンパク質が合成されたわ、去年アメリカで新薬承認されて製剤が開始された、ひとつはニューロンのシナプス結合を開放する作用があり、もう一つは再結合させる作用がある。延髄の最下部、脊髓との接合部には錐体交叉が在ってシナプス結合の集中帯が存在するの、そこにこの薬剤を投与してシナプスを開放しニューロンの連絡を遮断する、同時にその位置の頸椎靭帯と椎間板にメスを入れて切り離す。装具で50mmも引っ張れば、物理的な距離が開いて、ウイルスも侵入できなくなる。」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「先輩の首、切り離すんですかぁ！」

奥寺と笑子の叫びが、錯綜します。

「切り離すんじゃないの、頸椎を外して引っ張るだけ、脳本体をウイルスから守るためよ・・・。」

「他の器官はどうなる、気管や食道は？頸動脈だってあるだろ・・・。」
永山がオロオロしながら訴えます。

「気管も食道も5センチ位なら平気で伸びます、頸動脈だって・・・。」

「脊髄を通らない、他の神経から直接脳に感染するってことも・・・。」
奥寺の顔面も蒼白です。

「このウイルスの逆行性軸索輸送は、咬傷患部から一本道なの、他の組織に殆ど傷害を残さない、脊髄以外からの侵入は考えられないわ。」

「元に戻せるのか？・・・と云うか黒木の命を救えるのか？」

「まだ誰もやった事のないオペレーションです、やってみないと分かりません。ただ何もしなければ、玲ちゃんはこの一両日中に確実に亡くなります――。」

「どれ位、時間を稼げるんですか？」

「今はぎりぎりまで代謝を落とし、体外循環と生理塩類溶液の温度調整で、深部体温を25℃まで下げて体内雑菌の活動を抑えているの、このままウイルスの侵入が無ければ・・・でも、一週間は無理だと思うわ。」

「――先輩に逢わせてください。」

意を決したかのように立ち上がった笑子が、地下の手術室に降りて行きます。

準備室で全身を消毒し、専用の白衣に着替え、ウームプールに近付くと、「寒いでしょ、玲子さん・・・もう少し我慢してくださいね。」

水滴の付いたアクリルガラスに手を添えて、静かに瞼を閉じました。

プラスアルファの手術に5時間を要しました。

向日市に引き返す気にもなれず、3人は重苦しい夜を邸宅の中で過ごします。

無事手術が終わり、玲子の状態が健全である旨女医から告げられて、

警察車両で邸宅を後にしたのは、初夏の早い日の出に、夜が白み始める頃でした。

運転する奥寺が、ポツリと呟きます。

「ひとつ解らないんですが・・・そもそもあの野良猫は、一体誰が感染させたんでしょうか？」

「感染源か、何処かの外国から輸入されたペットか何かに・・・。」

「検疫に引っ掛かって無理ですよ。」

「密輸ってこともあるだろう。」

「リスクを負って、具合の悪い動物なんか密輸しませんよ。」

「コンテナに紛れ込んだ、鼠かなんかに・・・。」

「猫が鼠に咬まれるんですか？」

「じゃ、山から下りてきた野生動物だろ、今じゃ京都の街中でも、イタチやイノシシが走り回る時代だからな。」

「そう云った事故が無かったから、日本でこのウイルスは何年も忘れ去られているんです。国内の野生動物が、感染源だとはとても考えられません。」

「じゃ、何が感染源だというんだ！」

苛立った永山が大声を出します。

「あの猫に、長い時間濃密に接した人間は？」

「小学生や地域住民か？人が野良猫を、咬んだりせんだろう・・・。」

「口でかみ砕いたものを与えても、感染の可能性があるって穴見先生云ってましたよ。」

」

「汚い野良猫にそこまでせんだろう・・・ああっ？逮捕した被疑者かぁ！」

「停めて奥寺君！——そこのバス停！」笑子が金切り声を上げます。

「感染源は動物じゃなくって、人間だって云うのか！それもあの殺し屋かぁ！」

「——被疑者は今何処に？」

「向日町署の留置所から、伏見区の京都拘置所に移されたはずだ。Uターンだ奥寺！
Uターン！」



「——逮捕以来、ずっと黙秘権を貫いています、何も喋りません。担当の検事も頭を抱えています。」

拘置所の担当刑務官が、尋問控室に3人を案内します。

「起訴は？」奥寺が永山の顔を見ます。

「逮捕容疑のみで起訴された、プロの殺し屋だ恐らく。余罪に関しては一切物証を残していない。」

隣の尋問室に、二人の刑務官と共に被告人が入ってきます。ハーフミラーの観察窓から見える男は、痩せぎすの何処にでもいそうな中年です。肌が乾燥して粉を吹いているようで、同年齢の男性によくある、脂ぎった生命力とは対極の、分野を極めた職人の風貌さえ感じられます。世の中を達観したかのような穏やかな視線が、机の上の中空に注がれています。

「事情は既に、被告人に伝えています・・・どうされますか？」

刑務官から促されて観察窓から振り返った笑子が、永山の眼を見詰めて云います。

「——尋問していいですか？」

「検察の許可は取ってある、存分にやってみろ。」

背後のドアから部屋に入り、男の背中を見下ろしながら佇みます。

微かに消毒剤の匂いが鼻を突きます。

男の呼吸が一瞬止まり、膝の上に降ろした左手の小指がピクリと動きます。

狭い額に汗が薄っすら滲み、踵を持ち上げた脛が細かく震えて、スチールの椅子が音を立てます。

2分後、明らかに動揺した被告が、一杯に体を振じって不安そうな視線を笑子に投じます。

脇を抜けて、正面に対峙した女刑事の眼をじっと睨んだまま、殺伐とした長い沈黙が続きます。

やがて根負けした被告の口元に、微かな笑みが現れます。

「あんた、ここで俺を殺そうってのかい？」

「その眼は、人を殺す目だ・・・俺のと同じだ。」

「頼むから、その眼で後ろに立たねえでくれ・・・息が出来ねえんだ。」

両腕を机の上に上げて、開いた掌に顔を埋めます。

「あなた、今まで何人殺したの？」低い声で笑子が尋ねます。

「罪を償って死ぬ前に、命を一人救いなさい・・・。」

再び長い沈黙が続いて、ゆっくりと顔を上げると、「わかった・・・。」

被告の眼が、紅く充血していました。

「事情は聞いた、血でも肉でも好きなだけ持って行け。それから、担当検事呼んでくれ・・・全て話す。」

部屋に漂う消毒剤の匂いが、男の身から出る独特の体臭であることに、この時気付きました。

笑子が立ち上がり、入ってきたドアから部屋を出ようとする、と、「後ろに立つな！」オロオロと怯えきった眼で、絞り出す様に叫びました。

玲子は、首にステンレスの固定装具を装着され、ウームプールの水中に揺らいでいました。僅か5センチとは云え、白い女の首が異様に伸びて、見る人によっては、異型耽美な美しさをも感じ取れる映像なのかも知れません。

ただ多くの人にとっては、不運な女刑事を突如襲った災禍の代償として、非現実的な恐怖感と、同情を誘う光景でした。

穴見は玲子のこの姿を、他の誰にも見せない覚悟でいました。

永山や奥寺や笑子にさえも・・・。

——玲ちゃんの尊厳は、私が守る——

笑子には一週間と云ったものの、そこまでの延命には、穴見としても自信がありません、精々3日が限度だと覚悟を決めていました。

——錐体交叉部のシナプス開放により、自律神経系を含め脳による神経支配を失っている。唯一稼働しうる神経系は、脳から直接出る脳神経系と錐体交叉部より上の頸神経叢、首から下は脳との連絡を完全に断たれている。この状態を更に何日も維持することは、技術的にも、倫理的にも、無二の友人としての感情論に於いても、玲子に強いことはとても出来ない——



玲子と笑子のカップルとは、マイクロドローンの事件で最初に拘わった時から、何やら因縁めいた繋がりを感じていました。

東恩納医師の事件に於いて、笑子の命を救い、この上は玲子の出自をも含めて、濃密にこのカップルと拘って行かねばならぬ気がしていました。

玲子や笑子が疎遠に振る舞えば振る舞うほど、3人の関係は複雑に絡んでいく——。

そして今、玲子に対して、死際の尊厳をも、人々の視界から秘匿する以外に守ってやることが出来ない・・・。

同じ立場なら、東恩納医師は如何していただろう・・・私にはもう手の打ちようがない・・・。

「玲ちゃん・・・ごめんね・・・。」

凜とした穴見の信念が瓦解しかけたその時、手元の携帯が鳴動して——。

「――血と髄液、提供して貰いました先生！抗体が入ってると思う！先輩をこれで助けて！」

声にならぬ、笑子からの叫びのTELでした。

――あれから、1週間が経ちます。

地下の手術室から、邸宅2階の寝室に移された玲子は、清潔な純白のシーツの上で、何時もの様に微かな寝息を立てていました。

水分と養分補給の点滴スタンド、バイタルモニターの機材に囲われてはいましたが、肌の艶も、ほんのり明るい頬の赤みも、沈着冷静で聡明な、同時に天然でお茶目な、過日の女刑事の其れと寸分の相違もありませんでした。

玲子の看病の為、長期の休暇を取った笑子が常時付き添っています。

穴見と二人の助手も、特異な感染症患者の主治医として、当面の間観察するよう大学病院から指示を受けていました。

分離精製された被告人の抗体は、玲子の体に劇的な効果を現しました。

穿刺術により、脊髄の要所に投与された免疫グロブリン (抗体) は、異常な免疫反応も伴わず、約10時間のうちに脊髄神経中枢からウイルス抗原を完全に排除し、24時間後には下肢末梢神経、咬み傷部皮下組織からも、ウイルスの蛍光抗体反応が確認されなくなりました。



検察のその後の尋問により、被告人は通称“野良猫”と呼ばれたプロのスナイパー本人であり、主に南米に於いて政府・財界要人の暗殺に関わった後、日本に帰って最初の仕事で、使用した弾丸に自分の指紋を残すという、初歩的なミスを犯し、全国指名手配で追い詰められ、あの廃工場で1週間潜伏の後逮捕されたことが分かりました。廃工場のキジトラとは、手持ちの食料を分け合いながら食べていたようです。

保健所による任意の病理検査により、被告の体そのものが、今回のウイルスのレゼルボア (自然宿主・病原巣) であることが認定されました。

高等な哺乳類として初めてのケースであり、刑が確定し処分が実行されるまでの被告の身体の扱いが、医療系のメディアの間で取り沙汰されています。

玲子の体の“ミルウォーキー・プロトコル+ α ”からの復帰は壮絶なものでした。錐体交叉部の開放シナプスの再結合から始まり、頸椎の靭帯と椎間板の縫合
中枢神経系・末梢神経系・自律神経系の脳支配の回復、体内循環の回復、肺呼吸ガス交換の回復等、技術的に確立された手順通りに3人の医師がフル稼働で当たります。全ての処置が終わり、ウームプールから白い玲子の裸体を引き上げたのは、処置が始まった20時間後のことでした。

「やっぱり、今回のリッサウイルスは8番目の遺伝子型、全く新しい変異タイプだったのね・・・。」

検査機関から返送されてきた、ウイルス遺伝子検査報告書を示しながら、女医が笑子に説明します。

「やっぱり後遺症が残るんでしょうか？」笑子が心配そうに確認します。

「脊髄のニューロンに損傷を受けたものが在る筈よ、損傷の場所も、大体見当がつく、当面は車椅子生活になるわ。彼女の成体幹細胞を使って、私が責任もってリハビリ回復させるから、心配しないで。」

「それより、彼女が車椅子の間は、あんた玲ちゃんとSEX出来ないよ〜。」

「それとあんた、玲ちゃんの命救ったら、私に何でもするって云ってたわね・・・そんなら、その小麦色の若いお尻を、細い鞭で引っ叩かせてもらおうかなあ〜、可愛いお尻の穴を、好き放題させてもらおうかなあ〜。」

臨床のヤマ場を過ぎて、卑猥な冗談を交わす余裕も二人の間に生れていました。

「でも、どうして一週間も眠ったままなんですか？このままで大丈夫なんですか？」

「MRIでもPETでも、脳の隅々まで調べたけど異常は無かったわ、少なくとも脊髄より上に感染した痕跡はないし、脳は健全――。このまま、気長に待つしかないわ。」

「脳が健全で、どうして意識が無いんですか？」

「それはね、意識って云う概念が、医学でも生理学でも脳科学でも、まだよく説明出来ないからなの。意識有りは、自己と外界を認識できる状態って云うのが一般的だけど、感覚器官からの信号は、正常に届いている筈なのに、脳内の処理に伴う応答が無い、脳に全く障害は無いのによ・・・そういうことは往々にあること。自己の状態と外界の観測を伝える信号は同じでも、脳の処理を経た感覚は、万人異なる筈だわ。クオリア (感覚質) って云うんだけど、クオリアは本人にしか理解できない。こうやってベッドに横になって意識が無いように見えるけど、本人の意識は当の昔に復活して、ばりばり動き回ってるのかも知れないわよ。バイタルも瞳孔反射も正常だから、もう少し様子を見ましょ。」

「このまま、生涯意識が戻らないことも、あり得るんですか？」

「怖いこと云わないの！でもそれはもう本人の意志の問題、この世界で呼吸して、食べて排泄して、友達と馬鹿言っ、恋人とSEXして喧嘩して、親に甘えて子の世話をして、そんなことを継続しようって思う本人の意志なの、医者が如何こうしても始まらない・・・それは、あんたの親戚の東恩納医師だって、同じだと思うわ。」



梅雨も3日前に明け、容赦のない盛夏の日差しが、鬱蒼とした東山の森に、木漏れ日となって差し込みます。

途切れることもないクマゼミの合唱が、空調され締め切った寝室にも、漏れ聞こえます。

助手の一人が、下階から上がってきます。点滴のバックを取り換え、バイタルモニターを確認し、二人の昼食弁当の予約を訊いて、降りて行きます。

穏やかな日常が、ゆっくりと時を刻んでいました。

僅かに開いていた、天井のドーマの窓から、黒い塊が飛び込んできました。

バタバタ羽ばたいて、壁の彼方此方にぶつかって大きな音を立てます。

「嫌だ、蝉よ！蝉が入ってきた！」

「笑ちゃん、捉まえて叩きだしなさい！」玲子が大声を上げます。

玲子が大声を・・・。

「あらっ——穴見先生？どうかしたんですか？」

点滴チューブを付けたまま、ベッドの上で上半身を起こすと、「あら？そうだ！笑ちゃんあなた、穴見先生の検死報告、ちゃんと府警本部に提出したの？」

抱き合った笑子と穴見の四つの眼から、止めどない大粒の涙が、堰を切って流れ落ちてきました。

———終わり———

PS

大学病院のリハビリセンターに転院した玲子の脊髄の障害は、女医が憂慮した程深刻なものではなく、成体幹細胞を分化させた自身の神経細胞の処方により急速に回復し、3か月後には松葉杖での歩行が可能となり、車椅子を不要として、4か月後には日常の生活に支障をきたさないまで回復しました。そして、玲子が府警本部における通常の業務に復帰したのは、半年後のことでした。

また、玲子の命を救った、抗体を提供した被告は、2年後に第一審の判決が言い渡され、控訴を放棄し刑が確定しました。その後、大阪拘置所に移送収監された被告は、8年後大阪拘置所に於いてその生涯を終えました。

以上、全てフィクションであり、現実の個人、団体と一切の関係がありません。悪しからずご了承ください。尚、添付いたしました写真は、PhotoAC、及び Photock、より転載させて頂きました。

ネコ、踏んじやった！

<http://p.booklog.jp/book/121860>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121860>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト